

物質・意識・表象

高 取 憲一郎

Matter, consciousness, representation

TAKATORI Kenichirou

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第1巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 1/No.2

平成 17 年 2 月 28 日発行 February 28, 2005

# 物質・意識・表象

高取憲一郎\*

## Matter, consciousness, representation

TAKATORI Kenichirou

キーワード：エルハンモウミ，史的唯物論，社会的物質，芸術的表象，国吉康雄

Key Words: Elhammoumi, hisotorical materialism, social matter, artistic representation, Yasuo Kuniyoshi

最近、目にしたモハメッド・エルハンモウミ (Mohamed Elhammoumi) の2つの論文 (Elhammoumi, 2001, Elhammoumi, 2002) は、ヴィゴツキー研究，あるいは社会文化心理学を考える上で，新たな視点を提供するものである。本稿では，彼の論文に刺激されて検討し，考えたことを中心にして，その問題の在処を述べてみたい。

### 1 モハメッド・エルハンモウミの2つの論文を検討する

執筆者紹介によれば (Chaiklin, 2001)，モハメッド・エルハンモウミは，ノースカロライナの Edgecombe 短期大学の，日本ではほぼ非常勤講師に相当する外部教授 (Adjunct Professor) である。アメリカの研究者としては極めて異例であるが，学位は，フランスのソルボンヌ大学で1984年に取得している。近いうちに発刊の予定とされている，「アラブ文化と心理学」，「社会・歴史・文化心理学」という2つの雑誌の編集にあたっていて，社会・歴史・文化的環境における子どもの認知発達研究を専門としている。というような紹介になっているので，アラブ系アメリカ人の心理学研究者であると推察される。現在の職歴等から判断して，アカデミズムの世界では冷や飯を食わされている研究者であることがわかるが，それにも屈することなく新たな雑誌を出したりしながらがんばっているという姿が思い描かれるのである。また，彼の論文の引用文献を見ても，アメリカのネオ・ヴィゴツキアン世代の研究者たちは決して引用することのなかった名前が登場してくる。その名前とは，たとえば，フランスのルシアン・セーブ，ワロン，ハンガリーのポリツェルなどである。それに加えて，彼の場合は，多数のマルクスとエンゲルスの文献が引用されている。これもまた，これまでのネオ・ヴィゴツキー派の研究者には見られなかった特長である。もっとも，フィンランドのエンゲストロームだけは例外であるが，という一言を付け加えておこう。

彼の主張には私は共感を覚えるのであるが，次に2つの論文に沿って，ところどころに私自身のコメントを挟みながらではあるが，彼の見解を見ていきたい。

#### 1-1 2001年論文

この論文では，概略，以下のようなことを主張している。少し長くなるのであるが，必要であると考えるのでやや詳しく紹介してみたい。

20世紀の心理学の歴史の流れの中で，行動主義心理学を批判して現れた1960年代の認知革命お

---

\*地域教育学科

よびそれにつづく文化心理学は、どうしても乗り越えることのできない限界を持っていた。それは、認知革命は個人の頭の中の情報処理過程を問題にただけであったし、文化心理学は高次心理過程の記号論的過程を問題にただけであったからだ。私見を挟むと、この指摘は、たとえば、佐伯が1993年のある座談会の中で述べている次のような論点とも対応したものである。佐伯(1993)によれば、もちろんこれはその当時の話という限定つきで聞いてほしいのであるが、認知科学の主流の基本的発想は、人間の情報処理過程を個人の頭の中で自律的に行なわれているプロセスとして記述することであった。ところが、最近の5、6年の動向として、人間の情報処理過程を社会的実践として捉える立場、すなわち、思考を個人の頭の中の出来事としてではなく、社会的な相互作用の中で発生しているものとして捉える動きが顕著になってきた。これは、ソビエト心理学の影響である。このような佐伯の指摘と、認知革命の限界というモハメッド・エルハンモウミの指摘は一致する。さらに、彼は、認知革命と文化心理学の両方とも、思考、意識、活動がそれらの土台を構成する社会構造や社会制度とは独立なものとして分析されてきたという欠陥を持っていたと考える。

そこで、活動理論・社会文化アプローチの第一世代たる、ヴィゴツキー・ルリヤ・レオンチェフたちの研究への関心が高まったが、その場合に第一世代の本質が、単純化され誤解されて受け取られてきた。要するに、マルクスの主張が十分理解された上で取り入れられていないという大きな欠陥を持ったまま、活動理論・社会文化アプローチの第2世代たる現代の研究が行なわれているのだ。もう少し言うと、活動理論・社会文化アプローチを史的唯物論の見地からとらえるという点が、きわめて弱いということである。そのために、教室や家庭や職場における社会的実践過程は研究されてきたが、権力関係や貧富の格差、分業、階級などとの関連で社会的実践過程がとらえられてこなかった。この関連で、私の注釈をつければ、これを何とか克服しようとして結局はできなかったケースとしてはワーチの場合があるであろう。彼の、『行為としての心』(Wertsch, 1998)は、まさにその試みであるが、むなしくも成就できなかった例であろう。その理由は、ワーチの立場が、ちょうどモハメッド・エルハンモウミが文化心理学の限界として指摘した、高次心理過程の記号論的分析以上の領域へと広がることがなかったからである。ワーチ以外の研究者も、記号・言語・言語行為などだけに注目していて、最も重要な唯物論的基礎という点をまったく無視してしまっている。心理や意識は社会的実践活動から派生するものであり、記号的媒介、シンボル機能、認知過程などは第二次的な派生物である。これを考慮に入れていない。経済的基礎、階級闘争、現実の労働、現実の社会関係を無視しているわけだ。

さらにモハメッド・エルハンモウミは、人間の思考過程、意識、活動への社会・歴史・文化アプローチは生産力と生産関係との間の関連を考慮に入れることにより始められねばならないと主張する。生産力と生産関係の間の矛盾こそが、社会の発展、歴史の進歩、心理の発展の原動力である。この点で、マルクス主義こそが社会・歴史・文化心理学の中核である。人間の意識と歴史を説明するのは個人の具体的な物質的生活であり、人間の意識が人間の具体的な物質的生活と歴史を説明するのではない。社会・歴史・文化心理学の出発点は生産である。

以上のような論述を踏まえて、モハメッド・エルハンモウミは、社会・歴史・文化心理学の6つの視点を以下のようにまとめている。

- ①人間の高次心理機能、意識、活動は社会的生産諸関係の産物である。
- ②人間の高次心理機能、意識、活動は労働活動を生ぜしめるところの記号と道具により媒介される。
- ③人間の高次心理機能、意識、活動は発達のあるいは発生的分析により検証される。それは、ヴィゴツキーの言うところの変化(生成)の中で研究するということである。

- ④人間の高次心理機能，意識，活動は歴史の中で構築された人間の活動の中に根源を持つ。
- ⑤人間は生産のための道具を作り，そこから労働活動が生まれ，さらにそれが社会的生産諸関係を制御する。
- ⑥人間の高次心理機能，意識，活動は，文化の中で営まれる人間の活動により形成される。

まとめると，人間の思考，意識は生活の唯物論的条件の中に根を持っており，社会的生産関係が心理学の最も中心的な核になる。

以上のように検討してみると，認知革命後の文化心理学諸流派は史的唯物論の原点からは逸脱しているということになる。それらは，社会によって構築された現実の人間活動の基礎の上に行われる研究ではなくて，社会の下部構造たる生産関係から切り離されたところに成立した，いわば，物質的経済構造から遊離した心理過程の研究にしか過ぎないからだ。

この点から見ると，ルリヤたちの中央アジア調査は，例外的な研究であり，それは，マルクス・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』の実証になっている。

以上が，モハメッド・エルハンモウミの第1論文のあらましである。要するに，モハメッド・エルハンモウミは，史的唯物論の上に心理学を構築すべきことを主張しているのである。

## 1-2 2002年論文

この論文でも，結論をはじめに言えば，マルクスの言うところの，社会的生産関係（social relations of production）が人間の心理現象の核心であるということを出張している。

現在，ヴィゴツキー理論は，社会的諸関係が，心理機能へと収束されていくメカニズムが，媒介（とくに道具と記号）を介していかにして達成されるのかを説明する理論として一般的には解釈されている。そうではなくて，モハメッド・エルハンモウミは，ヴィゴツキー理論を解釈する際に，社会的生産関係という概念が重要であることを主張する。ところが，現在のヴィゴツキー派の人たちはそれを忘れている。たとえば，ロゴフ，ワーチ，ヴァルシナー，ファン・デル・フェール，コーズリン，モスコヴィッチたちは，全員，その点を無視している。

ヴィゴツキーの基本的見解は，社会と物質的生活の変化が人間の心理の変化を引き起こすという考え，すなわち，下部構造である経済的土台の変化が，上部構造である意識の変化を引き起こすという弁証法的史的唯物論の立場である。

従来，文化・歴史学派は社会的生産関係に対してよりも，記号や道具に対してより大きな注意を払ってきた。このような動向を修正するためには，マルクスの原典へと復帰することが必要である。

以上をまとめて言うと，現在のヴィゴツキー研究の弱点は，

- ①ヴィゴツキー理論の理解が部分的であり恣意的である。すなわち，道具，記号，言語，言語行為，最近接発達領域などが取り上げられ，社会的生産関係が無視されている。
- ②真の意味でヴィゴツキーを理解しようとするれば，マルクスの『ドイツ・イデオロギー』，『経済学批判要綱』，『資本論』の見解へと立ち返らねばならない。特にアメリカでは，ヴィゴツキーの心理学からマルクス主義的要素を抜き去ることを良しとしてきたという経過があるので，ことさらこのことが重要になってくる。
- ③ヴィゴツキーの心理学において社会的生産関係という概念が誤まって解釈されてきたことが彼の思想をゆがめてきた。

## 2 『ドイツ・イデオロギー』に即してモハメッド・エルハンモウミの主張を検証する

本節では、モハメッド・エルハンモウミ自身が主張の重要な根拠としている、マルクスとエンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』を参照しながら彼の所見を深めてみたい。

周知のように、マルクスとエンゲルスのこの著書は、唯物史観を構築した金字塔とみなされているわけであるが、心理学の、とりわけ社会・文化・歴史アプローチの立場から見たときにどういう視点が注目されるのかを考えてみたい。わが国におけるマルクス主義の文献学的研究は世界に冠たるものがあるのだが、残念ながら心理学研究の視点からはこれまでまったく触れられてこなかった。それと、モハメッド・エルハンモウミのいる米国では、マルクス主義の研究、特に哲学的研究の水準はわが国に比べて質量ともに格段に劣るので、日本の研究者は優位な立場に立るというメリットがある。

ここで、一つお断りしておかねばならないが、本論文で私が使用している『ドイツ・イデオロギー』の訳書は、花崎皋平(訳)『新版ドイツ・イデオロギー』(合同出版、1966年)、および廣松渉(編訳)『新編集版ドイツ・イデオロギー』(河出書房新社、1974年)の二冊である。最近の訳書として、服部文男(監訳)『[新訳]ドイツ・イデオロギー』(新日本出版社、1996年)および渋谷正(編・訳)『草稿完全復刻版ドイツ・イデオロギー』(新日本出版社、1998年)があるが、今回は参考程度にとどめて直接引用しなかった。前二著に比べて、なんとなくという程度の感じではあるが、読み手に訴えてくるものが少ないと思われたからである。ただし、これはあくまでも読み手である私の主観的な印象で言っているのであって、翻訳そのものの良し悪しというレベルの話とは異なることを付け加えておきたい。以下の部分では、花崎訳、廣松訳と記述することにする。

さて、私がかつとも強く注意を引かれたのは次の部分である。

花崎訳「天上から地上に下降するドイツの哲学とはまったく反対に、ここでは地上から天上への上昇がおこなわれる。すなわち、人間たちが語ること、想像すること、表象することから出発して、また語られ、考えられ、想像され、表象された人間たちから出発して、そしてそこから、生きた、ほんとうの人間たちのもとへたどりつくのではない。現実的に活動する人間たちに出発点がおかれ、かつかれらの現実的な生活過程の側から、この生活過程のイデオロギー的な反映と反響の発展もまた解明されるのである。人間たちの頭脳におけるぼんやりとした形象も、かれらの物質的な、経験的にたしかめうる、かつ物質的諸前提に結びついた生活過程の必然的な昇華物である。こうなると道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギーおよびそれらに照応する意識諸形態は、もはや自立性という姿態をたもちえない。それらは歴史をもたない、それらは発展しない。逆に、かれらの物質的生産と物質的交通とを発展させる人間たちが、こうしたかれらの現実とともに、かれらの思考活動とこの思考活動の所産とをも変革するのである。意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定する。最初の見方では、生きた個人のかわりに意識が出発点とされた。第二の、現実の生活に一致する見方では、現実的な、生きた諸個人自身が出発点とされ、意識はただかれらの意識とだけみられた。」(花崎訳、42頁)

同じ箇所を、廣松訳では以下のように言う。

廣松訳「天から地へ降下するドイツ哲学とは反対に、われわれの立場では、地から天へと昇る。すなわち、われわれは、人々が語ったり、想像したり、表象したりするものから出発するのではなく、また、語られたり、考えられたり、想像されたり、表象されたりしている人間から出発して、

そこから有体の人間のもとへ至るのではなく、現実活動している人間から出発して、人間の現実的生活過程から、この生活過程のイデオロギー的な反映や反響の展開をも叙述する心算である。人間の頭脳における茫漠とした像ですら、彼らの物質的な、経験的に確定できる、そして物質的な諸前提と結びついている生活過程の、必然的な昇華物なのである。道徳、宗教、形而上学、その他のイデオロギーはそしてまたそれに照応する意識諸形態は、そうなると、もはや自立性を見かけを亡う。これらのものは歴史をもたない、つまり、それらのものは何ら自律的に発展するのではなく、物質的な生産と物質的な交通を進展せしめる人間が、これら彼らの現実と一緒に、彼らの思考作用や彼らの思考の生産物をも変化せしめるのである。意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定するわけである。第一の考察方式では行為する生きた個人そのものとみなされる意識から出発するのに対して、第二の現実の生活に照応する考察方式では、現実の生きた諸個人そのものから出発して、そして意識というものはあくまでこれら実践的に活動している諸個人の意識、彼らの意識としてのみ考察する。」(廣松訳, 31頁)

このように、花崎および廣松の両訳文を読み比べてみると、この個所の理解が一層深化するのではなかろうか。

またもう一箇所、以上のところと関連して次のようにも述べる。

花崎訳「諸観念、諸表象、意識の生産は、まず最初は直接に人間の物質的活動と物質的交通という現実生活の言語にあみこまれている。人間の表象作用、思考、精神的交通は、ここではまたかれらの物質的活動態度の直接的流出物である。ある民族の政治、法、道徳、宗教、形而上学などの言語で語られる精神的生産に関してもおなじことがあてはまる。人間たちがかれらの諸表象、諸観念等々の生産者である。しかしその場合の人間たちとは、かれらの生産諸力とそれに照応する交通の特定の発展によって、交通のもっとも拡張した諸形態にいたるまで規定されているところの、現実的な、活動している人間たちである。意識とは、意識された存在以外のものではけっしてありえない。そして人間の存在とは、かれらの現実的生活過程のことを意味する。」(花崎訳, 40頁)

廣松訳「理念、表象、意識、こういったものの生産は、当初は直接に、人々の物質的な活動や物質的な交通、現実的な生活過程の言語に編み込まれている。表象したり思考したりすること、人々の精神的交通は、ここではまだ、彼らの物質的な関わり合いの直接的な流出として現れる。精神的生産——民族の政治、法律、道徳、宗教、形而上学、等々の言表において叙述されているたぐいのもの——についても同断である。人間こそが自分の表象、理念、等々の生産者なのである。但し、彼らの生産諸力の、ならびにこれに照応する交通の一定の発展によって、涯まで成型された交通の編成にいたるまで、制約されているところの、現実の、作動している人間こそがそうなのである。意識とは意識された存在以外のなにものでもない。そして、人間の存在とは彼らの現実的な生活過程の謂いである。」(廣松訳, 29頁)

ここで、生産力と生産関係の二つの概念が物質的活動と物質的交通と表現されていることに注意したい。また、この二つをあわせて、別の箇所では、市民社会と呼んでいることにも注意したい。

これと同じことを、精神はもともと物質に憑かれていたという表現で述べた有名な箇所が次の引用部分である。

花崎訳「われわれは、人間が意識をももつということのみいだすのである。しかし、それもまったくのはじめから、純粋な意識としてありはしない。精神にはもともと物質に一この場合は運動する空気層、音、要するに言語の形式であられるものではあるが一憑きまといわれるという呪がかかっている。言語は、意識とおなじだけ古い一言語とは、実践的な、他の人間たちのためにあってこ

そ、初めてまた、私自身のためにある現実的な意識である。そして言語は、意識と同様、まず他の人間たちとの交通の要求、渴望から生まれたものである。(中略) 意識はそれゆえ、そもそも始まりから、すでに社会的産物であり、およそ人間がある限り、それはかわらない。」(花崎訳, 59-60 頁)

廣松訳「精神はそもそもの初めから物質に憑かれるという呪いを負っており、謂うところの物質はここでは運動する空気層、音、要言すれば言語という形で現出する。言語と意識とは同年齢<sup>おないどし</sup>であって、一言語は、実践的な、他の人間にとっても実存するが故にまた私自身にとってもはじめて実存する現実的な意識である。そして、言語が生成するのは、意識と同様、まずは他の人間たちとの交通の欲求、必需からである。(中略)意識は、かくして、そもそものはじめからすでに、一つの社会的な生産物であり、いやしくも人間が存在するかぎり、そうでありつづける。」(廣松訳, 27-28 頁)

物質的生産という行為がなぜ土台となるのかについて、次のように言う。

花崎訳「人間たちは、歴史を作ることができるためには、生きていることができねばならないという前提を確認することをもってはじめる必要がある。しかし、生きるために必要なものとは、なによりもまず、食べることと飲むこと、住居、衣料とその他若干のことである。それゆえ、第一の歴史的行為とは、これらの要求をみたすための諸手段の産出、物質的生活そのものの生産である。しかもこれは、人間たちの生命を維持するためだけでも、数千年前であろうと今日ただいまであろうと、日々刻々なしつづけられねばならないような全歴史の根本条件としての歴史的行為である。」(花崎訳, 54-55 頁)

廣松訳「およそ人間の生存にとっての第一前提、従って、およそ歴史というものにとっても第一前提となるものを確定すること、それはつまり、歴史をつくることができるためには、人間が生活しえなければならぬという前提である。ところで、生活ということには、何はおいてもまず、食べたり飲んだりすること、住居、被服、その他若干のものが属する。第一の歴史的行為は、それゆえ、これらの欲求を充足せしめる手段の創出、つまり、物質的生活そのものの生産である。」(廣松訳, 22 頁)

さらにもう一箇所、観念的構成物を物質的实践から説明するということについて触れている部分を提示しておく。

花崎訳「この歴史観がよってたつところは、現実的な生産過程を、しかも直接的生命の物質的生産から出発して展開し、この生産様式と結びつき、それによって産み出された交通形態、すなわち種々の段階における市民社会を、全歴史の基礎としてつかむところにあり、そして市民社会を、その国家としての作用において解明するとともに、意識のあらゆる多様な理論的諸産物および諸形態、すなわち宗教、哲学、道徳等々を、すべて市民社会から説明し、そしてそれらの発生過程を、それらがもつづくそれぞれのところから跡づけるところにある。」(花崎訳, 81-82 頁)

廣松訳「この歴史観は、かくして次のことに基づく。すなわち、現実的な生産過程を、それも直接的な生の物質的な生産から出発して、展開すること、そしてこの生産様式と連関しておりかつこれによって創出されるところの交通形態を、従って、市民社会を、そのさまざまな段階において、全歴史の基礎として把握し、そしてそれを国家としてのその営為においても叙述すること、また、意識のさまざまな理論的所産と形態のすべてを、つまり、宗教、哲学、道徳、等々を、それから説明し、そしてこれらのものの生成過程をそれらからあとづけること、そうすれば、当然、そこではまた事象がその全体性において(そしてそれゆえにまた、これらさまざまな側面相互間の相互作用

も) 叙述されうる。」(廣松訳, 48-50 頁)

### 3 物質から意識へ

前節の『ドイツ・イデオロギー』の必要部分を提示する中で明らかになったように、意識の発生を物質的に把握するという視点が必要になるのであるが、その場合の物質とは、広義には自然的物質であるが、狭く限定して考えると、人間を「社会的に組織された物質」と見る物質概念である。このような物質概念は、私の敬愛する唯物論哲学者である古在由重のものがきわめて新鮮である。

古在由重「唯物論一般の原則」(古在由重著作集第1巻, 勁草書房, 1965年所収, 215-305頁)の中から、関連するところを抽出してみると以下のような記述が該当するであろう。

「人間の意識は単に特定の有機的構造をもつ物質の特性として規定されただけでは、まだ十分ではない。その本来の特性をつかむためには、なお人間の物質的な社会的存在および関係の特性としての規定がくわえられなければならない。」(236-237頁)

「マルクスのいったように、人間の意識は最初から純粋な意識としてあるのではなく、むしろ最初から『物質に憑かれ』ている。ゆえにただ物質から出発するときのみ、我々はその属性としての意識に到達できるのだ。」(243頁)

「人間の意識はまずその最初の出現をそれに先行する自然史の全発展において、つぎにその存続をその基底に存する一定の物質的構造におう。」(267頁)

「物質は、・・・(中略)・・・複雑多様な運動形態・発展形態を有する。意識はかかる物質的運動および発展の最高の所産である。しかも物質は、意識というこの特性をうみだすために、なんら自己以外のものを必要としない。」(268頁)

「哲学的範疇として理解された物質の概念は、・・・(中略)・・・自然科学一般の対象としての物質をつつむだけではなく、社会科学一般の対象としての物質をもつらぬかなければならないからである。」(269頁)

「しかし人間はそれらのほかに(自然科学の対象としての人間が物質的に規定される以外にの意：高取)なお社会的な規定をもつ。具体的な人間においては、この社会的性質こそ主要規定であり、他の諸規定はこれに従属する副次的諸規定にすぎない。いわば人間は、『社会的に組織された物質』にほかならない。そこで我々が銘記せねばならないのは、人間の社会的な規定もまた根源的には物質的な規定であること、そしてかかる社会的諸規定の結集としての人間もまた物質の概念のもとに包摂されねばならぬということである。」(269-270頁)

「哲学的範疇としての物質の概念は、自然科学的对象としての物質から、社会的に組織された物質すなわち、『社会的物質』としての人間までもつらぬくものとして把握されねばならぬ。」(271頁)

また、古在由重「現代唯物論の基本課題：歴史と理論の観点から」(古在由重著『和魂論ノート』岩波書店, 1984年所収, 177-282頁。とりわけ第二節, 「物質概念と史的唯物論」)の中では、次のように言う。

「生物とその他の非生物一般との本質的な区別は、後者が一般にその環境による物理的・化学的な作用によって解体するのに反して、前者は自己の環境との物質交代(物質代謝)によってのみ自己の存在と成長をたもちうる点にある。簡単にいえば一般の生物はその環境から栄養を摂取し、これを消化し、これを排出しながら生活してゆく。さらに微視的にみればそれぞれの細胞の内部にも



たえず一種の物質交代が行われており、この物質交代こそ生命の自己保存および自己成長の基本的条件とみられなければならない。したがって生命もまた一つの物質的存在にすぎないとはいえ、宇宙の原初からの物質の発展過程からそれをみると、それは高度の段階における物質形態にほかならない。

人間も・・・(中略)・・・やはり一種の物質交代なしには生存することができない。ただし人間の生活は、道具や機械を媒介とする労働なしにはありえない。そしてそれはこれを通じての環境との物質交代を自己の存立の必要不可欠な条件とする。すなわち、人間は自己の内部の物質的エネルギーによって、いろいろな物体の形や性質を変革し、これを自己の生活に同化し、消化しそして排出する。」(205頁)

又、概略、以下のようなことを述べている。直接の引用ではなく、要約して示す。

「人間生活の基本条件としての物質的生産とは、生物学的生活過程でも、生理学的生活過程でも、自然的人間の体内で生起している過程でもない。人間の場合は、外部から取り入れるべき衣食住(物質的生活)は、はじめから我々に与えられているのではなくて、その前に道具を使用してまず衣食住を生産しなければならない。生産→分配→交換→消費という循環過程の最後によく消費する。」(206-207頁)

要するに、「史的唯物論は人間の物質的生活過程の起点を物質的生産のうちにみいだす。」(207頁)すなわち、史的唯物論における物質的なものとは、広義の物質的なもの一般ではなく、人間の物質的生活の生産である。物質的なもの=生産という観点が重要であることを、古在は強調する。

また、戸坂潤は「社会心理学の批判」(戸坂潤全集第2巻、勁草書房、1966年、196-222頁)の中で、古在と同じことを以下のように述べている。要約して引用すると、

「意識の唯物論的把握とは、生理学や生物学に結びつけることではない。社会の物質的地盤にまで結びつけることである。物質的生産力乃至生産関係——経済関係——にまで結び付けられて初めて、意識(精神)は真正の意味での唯物論的取り扱いを受けたことになる。(そうすることにより)意識乃至精神も歴史的なものとして把握されることが出来る。」(205頁)

「今大事なことは、デュルケム乃至レヴィ・ブルジュール(ヴィゴツキーが依拠していたことに注目せよ：高取)による意識の分析が、社会の分析から出発するという点にある。・・・(しかし)この社会が、非社会的——非歴史的——にしか掴まれていない。・・・経済的な原因にまで掘り下げられて分析されていない。・・・社会の物質的基礎(物質的生産関係)の分析から出発しないで、(中略)中途の段階から出発する。」(215頁)

以上、古在、戸坂の論述によって、社会的物質と意識の関係が明らかになったのであるが、社会的物質のどのような運動プロセスが、意識のプロセスを生み出すのかという点が、いまだはっきりしない。その点では、労働過程と認識過程を同化・調節というピアジェの概念で統一的にとらえる瀬戸明の見解が参考になる。

#### 4 労働過程と認識：反映と構成(ピアジェの同化・調節)

史的唯物論の立場から、意識の問題を考えると、ただ単に、経済的下部構造が上部構造である意識を決定すると言っただけでは、問題があまりにも単純に解決されすぎて、実はなにも解明されていない。ただ、『ドイツ・イデオロギー』では、物質が言語として出現し、物質たる言語が意識を規定する、あるいは、物質たる言語と意識は同時に発生するという記述があるのは、すでに引用し

たとおりである。しかし、これでは、言語=意識であるということを行っているだけである。経済的  
下部構造たる生産活動が、どのようにして意識活動を規定するのが説明されなければならない。

そこで、注目すべきは、瀬戸明のピアジェの同化・調節概念を反映論の説明に取り入れた議論で  
ある（瀬戸明『現代認識論と弁証法』汐文社、1978年、特に第3章）。瀬戸は、経済的  
下部構造で機能している労働過程を、人間が外部の世界に働きかける作用の側面と、  
その中で外部の世界から逆に働きかけられて人間そのもの（人間性=人間的  
自然）が変化させられる反作用の側面との統合であるという一般的に理解されて  
いるとおりに受け止めた上で、この労働過程と全く同じ作用と反作用の統合され  
た過程が認識においても行われていると考える。いわば、労働過程と、認識過程  
の同型論であるが、このときの認識過程を説明する概念にピアジェの同化と調節を  
持ち込むのである。すなわち、同化とは、外部の世界を変形して自己の内へと取り  
込む働きであり、調節とは、逆に外部の世界によって自己が変形させられる過程  
である。この、同化と調節は同一の過程を二つの側面から描いただけであり、実  
は、それは同一の一つの過程にすぎないのであるが、いずれにしても、人間を含  
む生物が環境に適応する過程であり、自己を維持していく過程である。認識を、  
同化と調節の二つの側面から考えれば、反映というものも、ただ単に、外部の世  
界がそのまま写し取られるということではなくて、主観の側の構成作用も含むもの  
となる。言い換えれば、構成的反映ということになる。

以上の瀬戸の構成的反映説は、労働過程における主体の実践活動を認識のレ  
ベルにまで拡張した見解であり、労働と認識をつなぐ連関を明らかに示したとい  
う点で、意義がある。物質から意識が生まれると一般的に言っても、今ひとつ  
よく分からなかった点が、認識の中に労働過程を取り込むことにより、実は認  
識も労働も基本的メカニズムにおいて同じであるということになり、認識が労  
働過程の一部として包含され、両者は接続させられた。マルクスの労働と、  
ピアジェの同化・調節という概念が、ともに生命体の物質代謝過程であるとし  
てとらえて、それまでは、認識のレベルまでは労働過程を適用していなかつた  
のを、ピアジェを介することにより見事に関連づけられた。もともと、ピア  
ジェの同化・調節は、感覚運動期という身体的運動のレベルばかりではなく、  
操作期という認識のレベルまでも説明できる概念だったわけであるが、それ  
を、労働過程とうまく合体させて、同型論を完成させたのである。ここにお  
いて、従来、下部構造が上部構造を規定すると言われていたことの実態が明  
示されたのだ。二つの構造において機能しているのは、ともに労働過程（ある  
いはピアジェの用語では同化・調節過程）であり、メカニズムは同じものなの  
だ。換言すれば、認識論と史的唯物論が関連させられたのだ。物質から意識が  
派生するとは実はこういうことだと解釈してもよい。

## 5 認識から文学的表象の発生へ

前節までのところで、ピアジェの同化・調節の概念を介して、史的唯物論を  
意識へ適用する道筋を明らかにした。そのことにより、意識のなかの、特に認  
識的側面の最高形態であるピアジェの群性体という科学的かつ論理的な構造  
の形成までは労働過程および史的唯物論に沿って説明できるのではないかと  
思われる。こうなると、次の残された問題は、戸坂の言うところの、科学的  
範疇に一身上のニュアンスを付加した文学的表象へと議論を展開することであ  
る。ここで、議論の材料とするのは、戸坂の「道徳の観念」、「思想としての  
文学」（ともに戸坂潤全集第4巻、勁草書房、1966年所収）などの、科学  
的認識と文学的表象あるいは芸術的表象の関係を扱った諸論文である。戸坂  
によれば、文学的表象が表すものは自分であり、この自分というのは社会  
科学で分析できる個人と

は異なる。個人は存在であり物であり物質であるが、自分は意識であり意味であり存在しないものである。わかりやすく簡単に表現すると、科学的概念の外部を、空想力や構想力で覆ったものが文学的表象である。その中核には、科学的概念が存在するのだが、その周りを空想力や象徴力、誇張力で取り囲んだもの、その全体が文学的表象である。ここで思い出してほしいのだが、戸坂の認識論は、自然史、人類史、社会史を貫かれたものとしてとらえられているのであるが、その頂点に、われわれ人間の科学的認識が来るのである。さらに、その上に、個人独自のニュアンスを伴う一身上の文学的表象（それを戸坂はモラルと呼ぶのであるが）が乗ることになる。だから、この文学的表象＝モラルも自然及び社会に連続しており、自然および社会と切り離されてはありえず、その延長線上に、一身上のニュアンスを付加されたものとしてあるのである。換言すれば、個々人、ひとりひとりの独自の意識の在り方を問題としているのだ。ここに至って、生産に基礎をおく史的唯物論の上に、社会、意識、そして個人的な独自性をもつモラルが統一的に説明されることになる。

## 6 国吉康雄の場合

これまで述べてきたことを、日本の生んだ世界的な画家、国吉康雄の創作活動を一つの例にして説明してみよう。

国吉康雄という画家は、一般的には日本ではほとんど知られていないと言ってもいいだろう。私自身も、ごく最近までその名前すら知らなかった。私の場合は、今年(2004年)、国内各地で開催された「国吉康雄展」により、その存在を知り、さらに、今年(2004年)に出版された山口泰二著『アメリカ美術と国吉康雄』（日本放送出版協会、2004年）によって、その詳しい経歴と創作活動を知った。国吉は、アメリカで活躍した画家であるが、アメリカ国内にとどまることなく、広く国際的評価の高い画家であるというのが、私の現在理解しているところである。

詳しいことは省くが、国吉は、1889年に岡山市に生まれ、1906年に、単身渡米。様々な仕事をしながら食いつないでいたが、そのうち、絵の才能を認められ、美術学校に学ぶ。やがて、持ち前の才能を花開かせて、アメリカを代表する画家へと成長していった。その間に、太平洋戦争中の日本人排斥運動、戦後の赤狩り（マッカーシー旋風）などの逆風の中を、美術家の労働組合を組織しながら、反戦と民主主義の擁護のために闘いつつ、旺盛な創作活動を展開した。1953年、63歳で死去。

創作活動の面では、初期の写実的で伝統的な画風から、1920年頃からマルク・シャガール風の平面的でシュール・リアリスティックな絵へと変貌していく。やがて、愁いをたたえた、一連の娼婦らしき女性を描いた時期に入るが、これは国吉自身の苦悩、すなわち、日米開戦による日本人排斥感情の横溢、あるいはアメリカ民主主義の危機、などを原因とする抑鬱感の現れであるとされる。その後、終戦の後、わずかに希望を見いだした時期に描かれた作品もあるが、1948年頃を境に、内面的でファンタジックな道化師のマスクの絵などへと転換していく。

これが、大まかな、国吉の創作活動の変貌過程である。

表1には、国吉の生涯の経歴を、節となる年次ごとにまとめてみた。この表は、山口の著書の中に収録されている国吉康雄年譜、および山口の本文の記述を参考にしながら私独自にまとめてみたものである。

次に、国吉の生涯の中で特に注目される、いくつかの絵をもとに、私の提出した枠組みの有効性を実証してみたい。絵の解釈は、山口に従うことにする。

まずはじめは、国吉の代表作と言われている、「誰かが私のポスターを破った」（1943年）をとりあげてみよう。この絵に描かれているのは、国吉の一連の娼婦を題材にした絵に登場する憂い顔の

女性である。ページあるいはカーキ色の壁の前に、右手にたばこを持ち、左手は手すりを掴んでやや左下をうつむき加減に見つめている。その背後右側に破られたポスターがある。そして、そのポスターの破られた紙の上のあたり、憂い顔の女性の左後方に、サーカスの少女らしき小さな女性像が、まるで宙を飛んでいるかのように描かれている。

以上が、この絵の大まかな構図と登場人物及び品立てである。まず、破られたポスターから見ていこう。このポスターの原画は、国吉の友人、ベン・シャーンの「われわれフランス労働者は警告する」(1942年)である。そのポスターの中には、英語で次の言葉が書かれている。「われわれフランス労働者は警告する……屈服は隷属、飢餓、死を意味する」。もともと、この文章は、フランスがナチス・ドイツに占領されているときの、傀儡政権であるヴィシー政府が、ヒトラーの要請に基づいて、フランスの労働者をドイツに強制的に働きに行かせようとしたのに対する反対運動を描いているのである。その教訓をもとにして、アメリカの労働者に対してファシズムに屈服するなど訴えているのが、ベン・シャーンのパスターであった。そのポスターがアメリカにおいて破られたということは、アメリカにおいても反民主主義の動きが大きくなっていることを意味している。国吉は、そのようなアメリカの現実を、破られたポスターを描くことによって憂えているのだ。

さらに、女性の背後で宙を飛んでいるサーカスの少女は、いわば、前面の憂い顔の娼婦らしき女性の分身と解釈されているのであるが、未来への希望を表すものとされている。古典的絵画のキューピッドからヒントを得たと思われるこのサーカスの少女は、反民主主義の動きの中にあるかすかな希望を表現している。

このような、画中の登場人物、配置されたポスターを通じて、国吉は反ファシズムの運動への参加を訴えているのである。

国吉の略歴を紹介した部分からも伺えるように、国吉は積極的にアメリカ国内の民主主義擁護の運動や反ファシズムの国際的連帯運動に参加していた。その点では、当時の国際情勢あるいはアメリカ国内の政治情勢について、十分な社会科学的認識を持っていたと考えられる。それを基礎にした上に、国吉は彼独自の芸術的表象を、「誰かが私のポスターを破った」として表現した。

次に取り上げるのは、日本の敗戦が濃厚になったころ、あるいは、敗戦後に発表された、いずれも木馬を描いた二つの作品、「跳び上がろうとする頭のない馬」(1945年)と「祭りは終わった」(1947年)である。前者は、国吉の好んだプリミティブなアメリカの大地を背景にして、頭のない木馬が、背に紙とぶどうを乗せて前足を高く上げて空に向かって跳び上がろうとしている。馬の前には、破れたポスターがある。そのポスターには、「われわれは、自由な世界のために闘う」という文字が書かれている。この馬は、民主主義のために闘ってきた国吉を裏切り、頭のないまま迷走しているアメリカ民主主義を表していると考えられる。しかも、馬の背中に希望のシンボルであり、ブドウ摘み労働に従事した国吉自身のシンボルでもあるブドウを背負いながら、アメリカ民主主義にまだ一縷の望みを持ちながらも、現状に対して暗澹たる認識をもつ国吉の心情をよく表している。

後者は、荒涼たるアメリカの大地を背景にして、木馬が仰向けにされて、背中から一本の木によって刺し貫かれている。木馬の背後には二人の男女がまるで死んでいるかのごとくに横たわっている。画面の下部には、「LOOK」という文字が見られる。これは、注目せよという意味を示している。国吉は、この絵で、国吉自身がそれまで信じてきた、そして、擁護のための運動にもかかわってきたアメリカ民主主義が終焉したことを表した。戦争が終われば、好ましい変化があると思ったが何も変わりしなかった。この絵には、このような国吉の心情が吐露されている。

さらに、1947年の「ここは私の遊び場」を見てみよう。この絵は、建物の瓦礫の前面左手に破れ

た黒い日の丸が描かれていて、右手後方の建物の上のほうでは少女がブランコで遊んでいる。画面左下の、日の丸の下部には人の指があり、画面右下に描かれている7月4日という日づけを指差している。この絵の解釈は以下のようなものである。敗北した日本は、アメリカ独立宣言（宣言の発せられた日づけが7月4日である）が象徴する社会へ向かって、すなわち、民主主義へ向かって歩むのだという意味である。絵の中で、ブランコで遊ぶ少女は、生きる希望をあらわす象徴として現れている。また、この少女は、国吉が好んで描いた憂愁をたたえた女性の分身であり、現実に対して疲弊した女性から分化した希望の象徴である。

以上見たように、国吉の生涯は、彼自身が民主主義擁護のための運動の組織者として、先頭に立って闘ってきたという、他の画家とは異なる経歴により、われわれの問題関心を実証するための格好の分析対象となっているのである。国吉は、17歳で単身渡米して以来、アメリカの下層社会で厳しい労働に従事することから出発し、苦勞して自立していった。また、画家として大成していく過程で、人権擁護、反戦、反ファシズム、民主主義擁護の運動に参加した。その中で、自らの独自の芸術作品を作り上げていった。生活と労働の現実から出発し、社会科学的認識を獲得し、さらに、それを芸術的表象へと練り上げた。それらの作品群は、世界で唯一の国吉康雄一身の創作である。戸坂の科学と文学（芸術）の架け橋としての文学的表象（芸術的表象）という視点を、まさに具体的に生涯を通じてわれわれに示している。

## 7 おわりに

戸坂の文学的表象、あるいは芸術的表象について国吉康雄の場合を例にして検討してみたが、小説などの文学的表象に比べれば、絵画の場合は即座にその関係が理解できるという利点がある。国吉の生きた時代の経済・政治・文化・社会の動きと、その中で国吉がどのように行動し、またいかなる社会認識を持っていたか。そしてそれを、いかなる絵画表現として結実させたか。これらを通して、社会的に組織された物質たる人間が、生産活動を基盤としながら、その上に認識を構築し、さらに自己一身の芸術的表象を確立していく過程が一枚の絵画として表現されるのである。その点から考えれば、われわれは、物質・意識・表象という関係を、近代絵画史上の何人かの画家を比較検討することにより、さらに深めることが出来るように思われる。本稿で分析した国吉康雄以外にも、たとえば、ゴッホ、ピカソなどが、その候補にあがるのではなからうか。近代絵画史、特に、19世紀末から20世紀にかけて生きた画家の時代と社会、行動と認識、そしてその絵画的表象を、本稿で描いた物質・意識・表象の分析枠組みと、ライフヒストリー心理学的な分析枠組みを併せ用いることにより分析していけば、何か新しい視点が開けていきそうな予感がするのである。

## 文献

Chaiklin, S. (ed.) (2001) *The theory and practice of cultural-historical psychology*. Aarhus University Press.

Elhammoui, M. (2001) Lost—or merely domesticated? The boom in socio-historicocultural theory emphasizes some concepts, overlooks others. In S. Chaiklin (ed.) *The theory and practice of cultural-historical psychology*. pp. 200-217.

Elhammoui, M. (2002) To create psychology's own capital. *Journal for the theory of social behaviour*, 32, 89-104.

佐伯胖 (1993) 「座談会：変貌する認知科学とコンピューター文化」『思想と現代』33号, 6-28頁

Wertsch, J.V. (1998) *Mind as action*. Oxford University Press.

#### 参考文献

[図録] 生誕100周年記念 ニューヨークの憂愁 国吉康雄展, 1989-1990年

[テレビ放送] 新日曜美術館「遠いアメリカー画家国吉康雄の目」(2004年4月18日NHK教育テレビ)

表1 国吉康雄の生涯

西暦	年齢	世界とアメリカの出来事	国吉の行動	国吉の認識	作品
1889年					
1906年	17歳		岡山市に生まれる アメリカへ渡る。以後、1914年ごろまでさまざまな仕事(掃除人、ホテル従業員、農場労働者など)に従事しながら美術学校で学ぶ。	アメリカ人になりきろうと努力する。	
1914年	25歳		画業で自立でき始める。		
1919年	30歳	第1次世界大戦起こる	キャサリンと結婚。社会・政治的認識、社会主義思想の面で、キャサリンの影響を受ける。ヨーロッパの印象主義、表現主義とは異なるアメリカ・モダニズムの確立を目指す。		写実的な作風は減少し、俯瞰する視角を用いたシャガール風の田園風景(蛙、牛、鶏を含む)を描いたものが増える。鶏小屋、村落(1921年)、夢(1922年)、牛といるリトル・ジョー、乳しぼりの娘(1923年)
1922年	33歳		モダニズム画家のグループであるサロンス・オブ・アメリカの委員長に就任する(1936年まで)。		
1924年	35歳				カメラをもつ自画像(1924年)
1925年	36歳	新移民法の制定	1回目のヨーロッパ旅行。サーカスに興味をもつ。		サーカスを描いたものが現れる。力持ちの女と子ども(1925年)
1928年	39歳		2回目のヨーロッパ旅行	パリ滞在の経験から、人間開きの愛、造形の自由に関心を示される。	これ以降、1946年頃まで憂鬱をたたえた女性像が頻繁に現れる。
1929年	40歳	ウォール街の株価大暴落、経済恐慌始まる。エコー・ルド・パリの終焉。		現実の社会をリアルに見る指向、フアンタジーから現実への移行。	横たわる女、煙草を吸う女(1929年)
1931年	42歳	満州事変始まる。	日本に帰国し、父を見舞う。	軍国主義日本に対して大きな失望を感じる。	休んでいるサーカスの女(1931年)
1932年	43歳		キャサリンと離婚		ピンクスリッパの少女(1932年)
1933年	44歳	ヒトラーが政権につく。日本は国際連盟脱退。		アメリカ社会にある人種差別、保守主義への憂鬱	
1935年	46歳		サラと結婚。南部とメキシコを旅行。	反ファシズム。文化と人権の擁護。	もの思う女、デイリーニューズ、バーガンダイー(1935年)
1936年	47歳		アメリカ美術家会議執行委員になる。	反ファシズム。反戦。民主主義擁護。	パンダナをつけた女(1936年)
1939年	50歳	第2次世界大戦始まる。スターリンはナチスと不可侵条約を結ぶ。	進歩的美術家の集団であるアン・アメリカン・グループの会長に就任。		
1940年	51歳		スターリン問題でアメリカ美術会議脱退。	ソビエト社会主義への疑問	

